

# 講演会「リトアニア・ロマン主義文学における 感情の生態学<sup>エコロジ</sup>」

栗生田杏奈

## 1. 講演会概要

2025年12月2日(火)、東京外国語大学研究講義棟において、講演会「リトアニア・ロマン主義文学における感情の生態学」が開催された。本講演は総合文化研究所との共催による授業内公開講演として実施され、学部生・大学院生を中心に多くの聴講者が参加した。講演者は、ヴィリニウス大学言語学部リトアニア文学科長を務めるブリギッタ・スペイチテ教授 (Prof. Brigita Speičytė) である。

本講演では、19世紀リトアニア・ロマン主義を代表する詩人アンターナス・バラナウスカス (Antanas Baranauskas, 1835–1902) の長編詩『アニークシュチェイの松林』 (*Anykščių šilelis*, 1860–1861) を中心に、自然表象と感情の関わりについて論じられた。講演冒頭で教授は、現代の環境危機をめぐる議論において、科学的知識に基づく合理的判断だけでなく、感情や想像力、身体的経験が果たす役割にも目を向ける必要があると指摘し、それらを可視化し共有可能な経験として提示する手段として、文学、とりわけ詩の重要性を強調した。

## 2. 作品分析

19世紀後半に発表された『アニークシュチェイの松林』では、詩の冒頭から終わりにかけて、近代化や経済成長のために進められた森林伐採に対する反応が、ロマン主義的な憂愁を伴って描かれている。しかし本作の特徴は、自然環境の破壊そのものを直接描写する点ではなく、むしろそうした自然破壊によって「何が失われてしまうのか」という問いに焦点を当てている点にある。この詩は森の風景における「美」の本質的な意味を探究する作品であると、スペイチテ教授は説明する。

バラナウスカスにとって森とは「美」を経験する源泉であり、本作は自然の中での美の体験を、身体的・感覚的なものとして描き出している。視覚だけでなく、匂いや音、さらには当時の精神状態をも含む多感覚的な経験としての美が、詩の表現の中に刻み込まれる。その結果、森の美は、森そのものが失われた後であっても、詩を通じて人々の内面に呼び起こされるのである。

詩の第一部において、バラナウスカスは森を「美的経験の舞台」として描く。本作における「美」は、形の整合性や均整さといった一般的な美の概念に限定されず、生命力や感



覚的豊かさに根ざしたものである。多様な形、音、匂いを通して人間の感覚に働きかける森の美は、想像力を呼び覚まし、神聖なものへの感覚や世界との調和を感じさせる。

『アニークシュチェイの松林』では、伐採以前の森の様子が克明に描かれるが、そこでは見た目の美醜にかかわらず森に存在するあらゆるものが肯定的に表象される。林床には立派に育ったヤマドリタケや可愛らしいアンズタケが並ぶ一方で、あばた模様のベニテングタケや、子牛のぬめった目のように見えるキノコも生えており、バラナウスカスはそれらを等しく描き出す。昼には木の葉のざわめきや鳥や獣の声が合唱を形づくり、夜には微かな自然の音が静寂の中に響く。夜明けを迎えると、獣たちの騒ぎとともにナイチンゲールの独唱が森に広がる。洗練された音も粗野な音も含めて、この「森の合唱」は等しく美しいものとして経験される。

こうした森での多感覚的経験は、読者にエクスタシーやカタルシスといった深い感情を呼び起こし、人々を「経験を共有する共同体」として結びつける。「森の中で、なぜ泣いているのか分からないまま涙があふれる」という詩中の一節に象徴されるように、バラナウスカスは自然の美に呼応して生じる感情の浄化としてのカタルシスを描いており、教授はこの点がアリストテレスの『詩学』におけるカタルシス概念とも響き合うと指摘した。

講演ではさらに、匂いや音といった嗅覚・聴覚の描写が、人間の「内的世界」とその人を取り巻く「外的世界」を媒介する役割を担っていることが強調された。詩中でシロツメクサとアカツメクサを香りで識別する場面は、森の内部で語り手の感覚が鋭敏化し、恍惚状態へと移行していく過程を象徴している。

また、詩における音の描写について教授は、人間がエクスタシーを二つの方法で経験することが示されていると説明する。昼の森では鳥や動物の声が重なり合う「感覚の過多」によって祝祭的なエクスタシーが生じる。一方、真夜中の森では極度の静寂という「感覚の欠如」によって、葉や花の芽吹く微かな音さえ知覚されるようになる。こうした感覚の極致において、人間は非日常の枠組みへと導かれ、自然との合一が可能となるのである。本作における匂いと音の描写は、このようなエクスタシー的経験を生み出している。

聴覚に関するエクスタシーとの関連で、詩中では鳥の合唱がリトアニアの伝統的多声音楽スタルティネス (sutartinės) にたとえられている。スタルティネスは主に女性が歌い、男性は楽器演奏で参加する音楽であり、伝統的にその歌声は鶴の鳴き声になぞらえられてきた。講演では実際の楽曲の特徴を示すため歌唱者の写真や映像が紹介され、異なる声が重なり合うことで独特の調和が生まれる様子を視覚的・聴覚的に体験することができた。スタルティネスの名称が「一致・調和」を意味する語に由来することも説明され、複数の声で調和を生み出す歌唱方法が、自然との結びつきを重視するバラナウスカスの詩世界と深く響き合っていることが示された。

講演後半では、主に感覚的経験と言語・文化の生成との関係が論じられた。バラナウスカスの詩において言語は、人間を自然から切り離すものではなく、自然と人間を結びつける「媒介」として機能している。あるリトアニア民謡では、木の葉を「木の言葉」として捉えるように、「物言う自然」という伝統的な概念がリトアニア文化には存在するとスパイチテ教授は補足する。バラナウスカスの詩もまた、この文化的背景を受け継ぎ、森の「言語」に触発されることで創造性が喚起されているのだ。恍惚状態に至った人間の意識はいっ

たん環境へと拡散し、そこから再び「言語の主体」として再構築される。森は人々に言葉を発するよう促し、言語的創造性を刺激する場として機能する。バラナウスカスにとって人間の言語とは、自然の美から発せられるメッセージに対しての「応答」として生まれるものなのである。

詩の第二部では、自然と文化の相互作用の中で育まれてきた「循環構造」が中心的主題となり、詩が発表された当時のリトアニアの政治的状況も、その内容と深く関わってくる。この箇所からは、森における「美の体験」を起点として、リトアニアの共同体が歌を生み出してきた伝統と歴史を読み取ることができる。かつてリトアニアの森は道徳的退廃の時代に伐り尽くされたものの、人々は自らが創り出した歌に導かれるようにして、再び森を植え直した。リトアニアの人々は自然を一方的に支配するのではなく、むしろその内部に根を下ろし、自然の影響を受けながら生きる存在として、破壊の後には必ず再生を試みてきたのである。

破滅と再生を繰り返す循環構造はリトアニアの伝統的な世界観に基づくものであり、かつては不作や疫病といった危機的状況の後にも豊作の年が訪れ、自然の再生がもたらされてきた。しかし詩中では、人間中心的な貪欲さや権力の濫用による、一方的で不可逆的な破壊も描かれる。『アニークシュチェイの松林』が書かれた当時のリトアニアはロシア帝国の統治下にあり、帝政によるリトアニア語や文化に対する抑圧が進行していた。ロシア語による初版で検閲により削除された森林官のエピソードは、その状況を反映しており、自然破壊と政治的・経済的支配との結びつきを象徴している。

人間と自然の再接続を主題とする本作は、森の安全がそのまま共同体と文化の存続を意味することを一貫して示している。森が破壊されれば、人間の創造性や生命力もまた失われてしまうからである。このような視点は、バラナウスカスの他の文学作品や学術的著作にも共通して見られ、彼は言語・国家・民族といった文化的現象のあり方を、生命力に満ち溢れ繁栄する自然景観や消耗され荒廃した自然景観になぞらえて比較している。以上のように本作は、単なる自然賛美にとどまらず、自然と文化の衰退をめぐる政治的・歴史的な問いを内包しており、ロシア帝国の植民地主義的支配に対する批評も含んでいると、スペイチテ教授は評価している。

バラナウスカスのエコロジー観は19世紀の共同体的農業社会に強く根ざしており、この詩のメッセージ性が現代社会においてどの程度有効でありうるのかについては、疑問も呈されている。詩で描かれるようなエクスタシーやカタルシスといった感情は今日では体験しづらく、その表出も公的空間では抑制されがちである。詩に描かれる森での経験は、観光やレクリエーションといった限定的な形で接近可能となっており、リトアニアのアニークシュチェイ森林景観保護区 (Anykščiai Forest Landscape Reserve) における森林浴のプログラムや、上空から森を眺められる樹冠回廊がその例として挙げられる。現代人にとって、このような特別な装置や人工的構造物を介さずに、想像力や詩の力だけによって自然とのつながりを感じ取ることは、困難であるように思われる。

しかしそれでもなお、ロマン主義的で情動的な本作のエコロジー感覚は、自然を実利的資源としてではなく、感情的・精神的・社会的価値をもつ存在として捉え直す点で、今日においても重要な意義を持つ。詩を通じて、自然との関係から生まれる感動の一端に触れ

ることは、なお可能なのである。スペイチテ教授は、バラナウスカスの『アニークシュチェイの松林』が、読者に人間と他の生き物との隣接性やインタースピーシーズ（異種間交流）的な関係性を想像させる点において、環境への理解を育む芸術作品として重要な意義をもつと結論づけた。

### 3. 質疑応答

質疑応答では、講演内容を踏まえ、バラナウスカスの詩における翻訳や言語表現、宗教性を中心に活発な議論が交わされた。

まず、音響的・オノマトペ的要素の強いリトアニア文学作品は、翻訳によってその内容が変化してしまう可能性があるのかという問いに対し、スペイチテ教授は、翻訳は必然的に何かを失う一方で、翻訳先の言語や文化に固有の表現によって新たな意味が補われる可能性もあると述べた。とりわけ詩においては、音響的効果の完全な再現は困難であるものの、作品の中心的理念や情動の状態は他言語においても提示しうるとし、詩の翻訳は不完全でありながらも重要な実践であると強調した。

別の質問では、バラナウスカスの詩や思想を、彼が生きた時代の文学的・思想的運動への「応答」として読むことが可能かどうか問われた。これに対しスペイチテ教授は、『アニークシュチェイの森』を19世紀半ばのリトアニアおよびポーランド・ロマン主義文学の文脈に位置づけることができると述べ、ポーランド・ロマン主義を代表する詩人アダム・ミツキェヴィチ (Adam Mickiewicz) との文化的・言語的競争関係に言及した。逸話によれば、「森の詩的な風景を創造できるのはポーランド語だけであり、リトアニア語ではそれは不可能だ」というミツキェヴィチの見解をバラナウスカスは神学校在学中に耳にし、それに対抗するかたちで本作の詩を書いたとされる。ただし、この逸話は後年になってから語られるようになったものであり、事実であるかどうかは定かではない。しかしこの逸話は、リトアニア語とポーランド語のあいだに存在した文化的緊張関係を象徴的に示していると教授は述べる。実際ミツキェヴィチの『パン・タデウシュ』 (*Pan Tadeusz*) では自然が固有の言語を持つという発想は見られず、言語は人間にのみ属するものとして描かれている点で、バラナウスカスの詩とは明確な差異が認められるというのだ。

さらに、この詩を宗教的観点から読むことが可能かどうかについて問われた際には、バラナウスカスがキリスト教的世界観を背景に持つ詩人であり、詩中で森を「巨大な香炉」として描く比喩がカトリック典礼に由来することが説明された。また、人間による自然破壊は、キリスト教における「罪」の概念を通して捉えられており、道徳的問題として位置づけられている点が指摘された。ただし、他作家の宗教的描写に比べると、バラナウスカス作品における宗教的モチーフの扱いはより緩やかだとされる。

加えて、言語学者でもあったバラナウスカスの言語研究が彼の詩作にどのような影響を与えているのかが問われた質問では、『アニークシュチェイの松林』が方言版とバラナウスカスが独自に編み出した「標準語版」の二つのバージョンで書かれていることが紹介された。教授は、両者を比較することで音韻や響きの差異が明確になり、言語形態の違いが

詩的表現に与える影響を実感できると述べた。とりわけ方言版は、音の背景が豊かで表現力に富んでおり、バラナウスカスの言語学的関心が詩の創作そのものに深く反映されているという。こうした複数の言語バージョンでの執筆の試みは、異なる言語形態によって詩の表現がどのように変化するかを探究する姿勢を示すものであり、バラナウスカスの言語学者としての立場を体現していると、教授は位置づけた。

このほかにも、スタルティネスにおける男性の演奏参加のあり方や、自然と結びついた精神性がリトアニア固有のものか、あるいはバルト地域に共通する特徴かといった点についても議論が及んだ。このように質疑応答では、聴衆とのやり取りを通して、バラナウスカスの詩に内在する言語的特徴や自然観、宗教性、文化的・歴史的背景があらためて照らし出された。

本講演は、19世紀リトアニア文学の精緻な読解にとどまらず、現代社会における環境問題や人間と自然との関係を再考する視座を提示するものであった。さらに、詳細な詩作分析は、聴講者のリトアニア文化への関心を高めると同時に、他国文学との比較へと視野を広げる契機ともなった。感情や想像力、身体的経験を通して自然と人間の接続を試みるバラナウスカスの詩的思考は、今日の社会においてもなお、有効な示唆を与えているといえよう。

講演会「リトアニア・ロマン主義文学における感情の生態学」

日時：2025年12月2日（火）12:40～14:10（3限）

場所：東京外国語大学研究講義棟 333 教室

講演者：Prof. Brigita Speičytė (Vilnius University)

題目：Affective Ecology in Lithuanian Romantic literature

使用言語：英語

共催：総合文化研究所

# リトアニア・ ロマン主義文学 における感情の生態学<sup>エコロジー</sup>

2025年 12月2日(火)  
12:40-14:10

場所：研究講義棟 333 教室

\*授業内講演会ですが、どなたでもご参加いただけます。



**講演者** Prof. Brigita Speičytė (Vilnius University)  
**題目** Affective Ecology  
in Lithuanian Romantic literature  
**言語** 英語

Professor Brigita Speičytė is the head of the Department of Lithuanian Literature at the Faculty of Philology, Vilnius University. Her research focuses on Lithuanian literature of the Romantic period from a multicultural perspective. She is particularly interested in issues concerning the development of national literatures and the interaction between literary and cultural discourses.

連絡先：巽由樹子 tatsumi@tufs.ac.jp

共催：総合文化研究所